

## アイーダ、レクイエム、そしてロマンス。

金川 明裕



ヴェルディ

ジュゼッペ・ヴェルディ(1813-1901)の生涯唯一の「レクイエム」(1874)は、彼の円熟を如実に示す、重要な作品である。とはいっても、本来彼はオペラ作家であり、宗教音楽に属する作品というには、最晩年に書かれた「聖歌四篇」(1896)のほか、「主の祈り」や「アヴェ・マリア」など小品が存在するのみで、実に少ない。ヴェルディは教会を、ことに聖職者を嫌っていた。自らを「農民」と称し、サンタアガタに大きな農場を経営していたこの天才は、また頑としたプラグマティスト(実用主義者)でもあった。宗教に代表される神秘主義とは、おそらく相容れぬ気質だったに違いない。

その彼があえて「レクイエム」を作曲したのは、聖人とも崇めるアレッサンドロ・マンゾーニ(詩人・小説家)が亡くなったからである。初演はその一周忌(1874年5月22日)に、ミラノのサンマルコ寺院で催された。輝かしい音と、燃え上がるような情熱をたたえたこの偉大な「レクイエム」は、聴衆を熱狂させ、その成功は凄まじい反響を呼んだ。ミラノ市当局は、サンマルコ寺院に入り切らなかつた人々のため、急遽スカラ座での3日間追加公演を公示せねばならなかつた。そこには「収益の半分はマンゾーニ追悼行事のための基金にされる。演奏の指揮は作曲者自身がとることになろう」と書かれていた。

しかし一部の批評家からは、痛烈な批判も浴びせかけられる。曰く、「けばけばしい、安っぽい、非宗教的、反宗教的、感傷的で通俗」などなど。この批評は、オペラ作家としての彼が、生涯の大半でいわれたことと同様である。ヴェルディはしかし一顧だにしない。彼にとって奉仕すべきは、お金を払って劇場に足を向けてくれる観客であつて、追従をきつたりこき下ろしたりする輩ではないのだから。ヴェルディは批評家と呼ばれる人種を侮蔑していた。時に、ヴェルディ60歳。

彼がもつとも精力的に仕事をこなしたのは、1850年から55年にかけての間で、「リゴレット」「トロヴァトーレ」「椿姫」と、立て続けに傑作をものしている。彼にとって30代後半から40歳過ぎは、まさに男として脂ののりきった時期であり、ほぼ1年に1作ぐらいの勢いでオペラを発表し、またその制作に細かな指示を与え続けた。怒りっぽく、何事につけ父長的な性格は、「暴君」とあだ名され恐れられたが、熱狂的な観客の支持は、その名声を不動のものにしていた。

ところが1860年代に入り、作曲のスピードはわずかながらではあるが鈍くなる。「運命の力」から「ドン・カルロ」まで約4年、そして次作「アイーダ」までは5年の時間が費やされた。この間、ヴェルディに何が起きていたのであろう。進まぬ筆にただ悶々としていたのか。否。彼は毎日自分の農場で百姓仕事、大工仕事に精を出し、小作人を厳しく管理し、そして金勘定をしていた。その姿は、天才と謳われた作曲家がきつぱりと筆を折ったかのように、周囲には映つたに違いない。かつてのロッシーニのように。

実はこの頃、彼はあるロマンスの渦中にあった。相手はボヘミア出身のソプラノ歌手、テレーザ・ストルツである。ヴェルディの妻ストレッポーニは、マエストロより2歳年下。生涯を通し、献身的に夫を支え続けたが、当時すでに50歳を超える、容色にも衰えが見え始めていた。情熱の塊のような作曲家の興味が、若く豊満な歌手に向かったとしても不思議ではない。ストルツは、ヴェルディにとって数少ない盟友の一人である指揮者マリアーニの恋人だったが、結果的に横取りする形になった。ヴェルディは「アイーダ」のタイトルロールに彼女を起用したいと考えていた。はたゞには遅々として進まぬよう見えながら、キャラクターの造形や台本の手直し、印象的な旋律の作曲など、仕事はしているのである。それもこれも、ボヘミアの女性を際立たせたい一念からではあつたが。

時は満ちた。彼は五線紙の前に座り、猛烈な勢いで音符を埋めていく。「アイーダ」はわずか5ヶ月で書き上げられたという。彼は以前からこう語っていた。「うまく作曲するためには、素速く、ほとんど一気に書かなければなりません。あとでその大雑把な下書きに手を加え、形を整え、磨きをかけるのです。そうしなければ長期にわたって作曲することになり、つぎはぎのような音楽、スタイルも特色もない音楽になってしまいますおそれがあります」

「アイーダ」は、スズラン河貫通祝賀式典の一環として、カイロの劇場から委嘱されたものである。当然その初演(1871)はエジプトにおいてであったが、ヴェルディはそれに立ち会おうともせず、3ヶ月後に予定されていた同作品のスカラ座公演に向け、出演者をジェノヴァに集めて稽古をつけていた。テレーザがカイロの公演にはキャスティングされず、スカラ座でタイトルロールを歌うことになっていたからである。

1872年2月8日、ミラノはときおり糠雨の降る、寒く湿っぽい夜だった。劇場のチケットはすでに完売。半上間席、天井桟敷席の別なく満席となったスカラ座で、「アイーダ」の幕が上がる。成功の兆しは開幕後すぐに見え始めた。音楽がアムネリスの祈りとともに静かに消え、最後のカーテンが降りると、拍手はまるで爆発するかのように、客席に鳴り響いた。人々は作曲家の名を、歌手の名を連呼し、アンコールを要求する。ヴェルディは都合40回も舞台へ呼び出されたという。それはさながら「お祭り騒ぎの興奮」だった。

マンゾーニが倒れたのは、翌1873年1月のことである。アレッサンドロはサンフェデーレ教会へ行く途中の道で転倒し、石段で頭を打った。この時から彼の頭脳は変調をきたす。非凡であった記憶力は碎け散り、かたわらにいる人間の名前もしばしば忘れてしまう。話す言葉が不自由になり、歩行もおぼつかない。身体は痩せ、皮膚はひからび、ついには植物状態に陥った。稀に正気に戻ると、告解の言葉を何度もつぶやき、「これで私は許されただろうか」と周りの人間に聞いたという。5月11日、就寝後激しい発作に襲われた彼は、死との戦いを11日間続ける。錯乱し謫言を言い、ときおり痙攣を起こしたが、それも次第に弱々しくなり、22日の夕暮れに息を引き取った。

ヴェルディの落胆は尋常ではなく、著名な楽譜出版者ジューリオ・リコルディへの手紙にこう書いている。「我が国の偉人の死を心から悲しんでいます。でも私は、明日ミラノへは行きません。葬儀に参列する勇気がないのです。近いうちにひとりで、他の人に知られぬよう墓参に行くつもりです。おそらくその時、追悼のための何かを提案することになるでしょう——これは内間に願います」

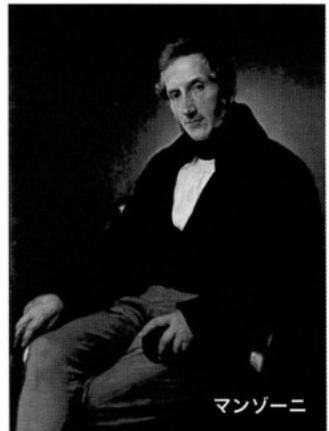
その提案というのが、「レクイエム」の作曲と一周忌の追悼公演であったことは明らかである。リコルディに告げたように、ヴェルディは6月2日ひとりでミラノに行き、マンゾーニの墓を訪れた。翌日ミラノを発つ前に再び手紙を書いた。「ミサ曲は大編成のもので、大オーケストラと大合唱のほか、4、5人のソリストが必要になるでしょう。市は演奏の費用を負担してくれるでしょうか?」譜の費用は私が持ります。練習も、教会での本番も、指揮は私がするつもりです。ためしに市長に掛け合ってみてください。ミラノ市当局はこの申し出に感謝し、市長ジューリオ・ベリンザーギの心からの感謝がヴェルディに伝えられた。

6月25日、彼は妻ストレッポーニを伴い、パリへ旅立っている。滞在はほぼ3ヶ月。この街を「グラン・バビロニア(大いなる悪徳の地)」と呼びながらも、再三にわたり訪れたマエストロ。その理由は、パリという街が彼に集中力と緊張感を与えてくれるからであったろう。「Libera me(私をお救いください)」と「Dies irae(怒りの日)」の一部は出来上がっていった。かつてロッシーニ追悼のために作曲したものの、演奏されずにいたものが手元にあったから。しかし、それ以外の部分を書かなくてはならない。「アイーダ」完成後の虚無感と、マンゾーニを失った無力感から脱するには、この街の力を借りるほかなかったのだ。

9月も中旬になって、夫妻はサンタアガタに帰り着くが、葡萄の収穫時期と重なって、作曲はいっこうにはかどらない。一気に進み始めるのは、冷たい風が冬の訪れを告げる頃、ジェノヴァに移ってからである。いったん靈感が降りてくると、熱に浮かされたように噴出してくるのは、いつものことである。楽譜は4月10日に出版業者に渡されている。

一部の批評家から、あまりに世俗的であると批判されたヴェルディの「レクイエム」であるが、当時の音楽家たちはこの作品をどう見ていたのであろう。高名な指揮者ハンス・フォン・ビューローは、当初これを凡作と呼んだが、のちに丁寧な詫び状をヴェルディに送り、「このレクイエムこそ、今世紀最高の名曲です」と断言している。また、ヨハネス・ブラームスは、「このような作品は天才でなければ書くことができない」と正しく評価した。ヴェルディの視点はあくまで「農民」のそれであって、描かれている恐れと不安は、自然の脅威に為す術もなく空を見上げている、ごく普通の人のものだ。そこに形而上の価値観を云々することは、的外れもはなはだしい。ヴェルディ生誕200年を迎える今日まで、聴衆の直截的な反応は続いている。この作品が傑作である何よりの証しであろう。

ヴェルディとストルツの関係が、その後どうなったか、気にかかるところだ。「レクイエム」のソロは当然彼女であったし、「アイーダ」が再演されるたび、彼の近くにはテレーザの影が見え隠れする。がしかし、巨匠が「オテロ」を作曲し始める1884年頃には、ふたりの仲は終わっていたようである。ヴェルディ、70歳。「レクイエム」初演から10年を経て、妻ストレッポーニにもようやく平穏な日々が戻ってきた。



マンゾーニ